

I 福山市

ミッション

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

ビジョン

資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する 資質・能力	コミュニケーション力 学びに向かう力
○校区合同で教材研究や交流を進められ、よりわかる授業を追求されている。 ○「生活につながる」「将来につながる」授業実践が続いている。 ●課題を共有し、引き続き児童生徒に寄り添い実態に応じた取組を重ねてほしい。 ●地域とのつながりを広げてほしい。	○自分で目標を立て、友達と学び合いながら「考える、選ぶ、決める」経験を積み重ねることにより、「学びが面白い」と実感する児童生徒が増えてきた。 ○自分たちが学校を創る主体となり、試行錯誤しながら創意工夫することを楽しむ児童生徒の姿が見られる。 ●家庭学習時間が少ない。スマホやゲームの利用時間が長い。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	共に学び、共に支え、未来を切り開き、地域・社会に貢献する生徒 ◎研究テーマ：できる・わかる・主体的に取り組む児童・生徒の育成 ○ 児童・生徒が、授業での学びを日常の様々な場面で活用し行動できるようになる。 ○ 児童・生徒が、自己肯定感・自己有用感を高める。 ○ 校種、教科・領域をこえた合同研修等を行う。

ミッション	育成する 資質・能力	A コミュニケーション力 B 人としての思いやり C 課題発見・課題解決
社会に貢献できる人づくり	めざす 子ども像	1・2年 A 人の話を最後まで集中して聞き、自分の思いを伝えることができる。 B 自分や友達の良いところや頑張り気付けことができる。 C 「やってみよう」「なぜだろう」と思ったことをもとに課題を見つけ、解決方法を考えることができる。 3・4年 A 相手の考えを受け止め、自分の考えを伝えることができる。 B 自分や友達の良さを見つけたり、違いや多様性に気付いたりすることができる。 C 学習や生活の中から課題を見つけ、友達と一緒によりよい解決方法考え、課題を解決することができる。 5・6年 A お互いの意見を出し合いながら、よりよい良い考えを創り出すことができる。 B 自分や友達の良さや多様性に気付き、互いを認め合うことができる。 C 探究的な学習の過程を繰り返し、連続することにより、課題の練り上げを行ったり相手意識を広くもって発信したりすることができる。
学校教育目標	研究	テーマ 「人間愛」と「自己調整力」を育む授業の創造 ～学びを深め合う児童の育成～ 内容等 授業の中で、児童が自らの考えをもち、主体的に課題解決する方法を身に付けるとともに、互いに意見を交わし合いながら深い学びを実現することを通して、自分のよさや成長、協働的に学ぶよさなどを実感できる授業を追究する。
現 状	めざす授業の姿	◎自分の考えをもち、適切な学習方法や学習内容を選択しながら学びを深める授業。 ◎語り合いを通して多様な考えに触れ、よりよい解決策を見出しながら問題解決する授業。 ◎困り感を伝えられる安心できる学級風土に支えられた温かい授業。

豊かな心をもち 共に高まり合う 子どもの育成

＜児童生徒＞
○課題発見・解決学習、授業後の自己の成長を振り返る学びを継続することにより、学びの面白さを実感し、自己肯定感が向上した児童が増えた。
○「学び合い」を通して、他者とのつながりを大切にする児童が増えている。
●習得した知識、技能を活用する力が十分ではないため、カリキュラム・マネジメントの充実を図る必要がある。
＜授業＞
○授業公開や事前・事後の協議会を通して、「選ぶ・つながる・広がる授業づくり」に向けた取組は広がってきている。
●児童一人一人の学習状況を把握し、個に応じた手立てを工夫するなど、学力向上につながる授業づくりが必要である。

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

80 福山市立道上小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)			
							□指標に係る 取組状況	力以 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力以 評価	達成 評価	総合 評価
3	学習場面において児童に自己調整力を発せさせることにより、「主体的・対話的で・深い学び」を実現する。	★	見直し	○児童に基礎的・基本的な学力を定着させるとともに、「深い学び」を追究する。	・研究授業や研究協議を通して、授業における「深い学び」の具現化を図る。	(1)『「深い学びの実現」に資する授業改善のポイントが捉えられた。』のアンケートに肯定的回答をした教職員の割合を90%以上にする。								
					・授業における「言語活動の充実」を重視し、その効果を高めるための言語能力習得・活用場面を適切に設ける。	(2)実証研究授業における「言語活動の効果」に係る児童の肯定的回答の割合を80%以上にする。								
					・朝の学習時間や家庭学習を授業とつなげ、基礎学力の定着を図る。	(3)国語科・算数科における単元末テストの知識・技能領域において、平均点が40%未満の児童の割合を5%未満にする。								
3	人と人とのかわりを重視した教育活動の推進		見直し	○他者とのかわりを通して自らが役立っているという実感を高めるとともに、ソーシャルメディアと上手に付き合う素地を養う。	・異学年交流を昨年度より活発なものにするために校内の諸活動を工夫し、有意義なものにする。	・「自分の良さは、周りの友達に分かってもらっている」「自分は人の役に立っている」の項目において、肯定的な回答の割合を前年度以上にする。								
					・スマホやタブレットの上手な使用(時間・内容)について家庭で考える機会を設け、自己の生活を振り返らせる。	・スマホやタブレットでゲームや動画視聴、SNSをする時間に係り、1日3時間以上の児童を30%以下にする。								

プロセス評価の評価基準		達成評価の評価基準		総合評価の評価基準		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。